

「せとうち発見の道」企画展

「交易・交流と瀬戸内市

～つながりを示すモノ、つながる地域～

2020年12月1日（火）～2021年2月28日（日）

瀬戸内市民図書館

南は瀬戸内海に面し、西には吉井川が流れる瀬戸内市。残されている文化財には、遠方からもたらされたモノがあり、古くから交易・交流がさかんであったことを裏付けています。

本展では、発掘調査などで発見された、交易を示すモノによって、他地域とのつながりをもった瀬戸内市を再発見します。また、現在の友好都市交流についても、由来や「縁」をふりかえります。

◆朝鮮半島からやってきた？奇妙な土器

熊山田遺跡（邑久町山田庄）で、奇妙な土器が発見されています。弥生時代中期の住居跡から出土したもので、日本の遺跡で見つかる弥生時代の土器には見られない特徴をもっています（ずんぐりとした形、反り返った口縁部、作るときの粘土ひもの重ね方、回転台を使用しない作り方など）。

この土器は、古代の朝鮮半島南部で見られる「松菊里（ソングンニ）式土器」と呼ばれるものによく似ています。日本国内でいくつか見つかっている例では、朝鮮半島から直接もちこまれた可能性があるものや、真似をして国内で作られたとみられるものがあります。

なぜ、このような土器が山田庄にあったのでしょうか。まだ謎は解明されていませんが、この土器が「松菊里型住居」と呼ばれる特徴をもった住居跡で見つかったことから、朝鮮半島との関わりを示すものとして注目されています。

※『邑久町史考古編』279～281頁等に紹介があります



無文土器系土器

熊山田遺跡（邑久町山田庄）

弥生時代中期

瀬戸内市蔵

高さ：24.5 cm

最大径：約 16 cm



築山古墳（長船町西須恵）の石棺
岡山県指定史跡

◆熊本から運ばれてきた「阿蘇ピンク石」

—築山古墳（長船町西須恵）の石棺—

築山古墳は、5世紀後半の前方後円墳です。墳長は約 82mで、墳丘のまわりに二重の周濠をもち、全長は 115mに及びます。

現在、竪穴式石室の一部と家形石棺が露出しています（左の写真）。石棺は、阿蘇山の凝灰岩、通称「阿蘇のピンク石」で作られたものであることが分かり、熊本の方から船で運ばれてきたと考えられています。

※『長船町史史料編（上）』65～77 頁等に紹介があります

◆都や近畿地方に運ばれた焼物 —鴟尾（しび）—

古代の邑久郡（いまの瀬戸内市など）は、須恵器などの焼物を焼く窯が多く、それらは「邑久古窯跡群」と呼ばれています。なかでも、寒風（さぶかぜ）の窯跡が有名で、当時の都で使われたものを生産していました。

大阪市の細工谷遺跡から見つかった鴟尾（寺院の屋根を飾るもの）が、分析の結果、寒風や新林窯（邑久町尻海）で生産されたものであると考えられています。

細工谷遺跡は、百済尼寺の遺跡と考えられています。つまり、寒風や新林窯で焼かれた鴟尾が、百済王家の流れをくむ一族の寺の屋根を飾っていたと考えられるのです。

※『牛窓町史通史編』160～174 頁などに紹介



新林（宮嶮）窯跡の鴟尾（しび）
7世紀末ごろ 瀬戸内市蔵

◆中国産の輸入陶磁器（青磁・白磁など）

瀬戸内市民図書館と中央公民館が建っている敷地は、地下に「助三畑遺跡（すけさんばたいせき）」という遺跡があります。この遺跡の調査で、この場所で 2,000 年以上前から現代にいたるまで、人が住んだり、建物を建てたりして、活動してきたことが分かっています。

ここで使われていたものの中には、遠方からもたらされたモノが多く含まれています。その中のひとつ、12 世紀ごろの中国産輸入陶磁器は、当時としては大変な貴重品だったと考えられます。そのようなモノを所持し、使っていた人々とは、どんな立場で、どんな活動をしていたのでしょうか。

※『邑久町史考古編』508～513 頁に紹介があります



青磁碗（同安窯系）

助三畑遺跡（邑久町尾張）

12 世紀ごろ

瀬戸内市蔵

高さ：8.0 cm 径：18.0 cm

◆大分県からやってきた!? 餘慶寺の梵鐘



梵鐘

岡山県指定重要文化財（工芸）

餘慶寺（邑久町北島）蔵

高さ：94.8 cm 口径：59.0 cm

鐘に刻まれている銘文によると、この鐘は、戦国時代の元龜2年（1571）に「豊後国大分郡府中」（大分市）の「今小路」にある「惣道場」に寄進されました。

豊後国の府中は、当時キリシタン大名といわれた大友氏の本拠地でした。寄進先の「惣道場」は、浄土真宗寺院、ないしは小規模な真宗門徒の集会場のことを指すと考えられています。

鐘を寄進したのは2人の明人（当時の中国人）で、ひとり「台州府」の「廬高」、もうひとり「平羊縣」の「陽愛有」です。「台州府」は中国浙江省の台州市、「平羊縣」は平陽県とみられます。2人がどういう人物であったか、分かっていません。

豊後の府中に寄進された鐘が、なぜ餘慶寺にあるのでしょうか。はっきりしたことは分かっていませんが、豊臣秀吉が九州に攻め入ったとき、宇喜多秀家軍が豊後に行っていることから、宇喜多軍が戦勝の記念に持ち帰り、餘慶寺に奉納したものではないかと伝わっています。

※『邑久町史文化財編』132～139頁等に紹介があります

◆鹿児島からやって来た? 異国風の石灯籠

拝殿の前に立つ2基一対石灯籠です。アーチのようになった高い台脚の上に、中台、火袋、笠が乗っていますが、これらは宮殿の建築を細かく表現した彫刻となっています。

この灯籠は、神社に奉納される石灯籠としては珍しい形をしています。デザインは中国風、もしくは琉球（現在の沖縄県）風で、石材も、調査の結果、鹿児島県産の反田土石（たんたどいし）であることが分かりました。つまり、鹿児島県で作られ、尻海に運ばれたものと考えられるのです。

この石灯籠が奉納されたのは江戸時代の安永7年（1778）で、奉納したのは「薩摩屋藤太夫」という人物です。藤太夫については詳しいことが分かっていませんが、薩摩屋という屋号から、薩摩国、つまり現在の鹿児島県と関わりのある人物であることが推測できます。

尻海や牛窓の豪商の中には日向国（現在の宮崎県）や薩摩国の山を請負い、材木を伐りだす大規模な事業を展開していた豪商もいます。薩摩国での商売に成功した薩摩屋が、ふるさと尻海の氏神に感謝の意を込めて奉納したのかもしれない。

※『邑久町史文化財編』102～107頁に紹介があります



石灯籠（2基一対）

瀬戸内市指定重要文化財

若宮八幡宮（邑久町尻海）蔵

高さ：360.0 cm

瀬戸内市の友好交流都市

●長崎県対馬（つしま）市

対馬市は、対馬島などの島からなる市で、人口は約 30,000 人。江戸時代に朝鮮通信使の先導役を担ったのが対馬藩でした。朝鮮通信使がつなぐ縁で、1996 年に対馬厳原（いずはら）町と牛窓町で縁組し、2006 年、あらためて対馬市と瀬戸内市で姉妹市縁組が結ばれました。

●大韓民国・密陽（ミリャン）市

密陽市は、慶尚南道の北東部に位置し、人口は約 106,000 人。朝鮮通信使派遣のきっかけをつくった松雲大師（しょううんだいし）という僧侶のふるさとです。2005 年 11 月、密陽市と瀬戸内市が友好交流協定（日本側協定書）に調印、翌年 4 月、韓国側協定書の調印式が行われました。

●北海道幌加内町（ほろかないちょう）

幌加内町は、北海道の北西部にあり、人口は約 1,500 人。1989 年、NTT の海底・湖底ケーブル記念通話が結ぶ縁で、当時の牛窓町と姉妹町縁組が結ばれました。中学生の修学旅行などの交流が行われました。



◆朝鮮通信使行列

「瀬戸内牛窓国際交流フェスタ」の中で行われます。

現在は、実行委員会により開催されています。

韓国の密陽市などからも参加があります。

【番外編】「日本のエーゲ海・牛窓」

昭和 57 年（1982）、当時の牛窓町は、観光や産業振興、町のイメージアップを目的として、「日本のエーゲ海・牛窓」というキャッチフレーズを選定しました。

これは、地方自治体の国際親善推進による平和と友好の確立を目指すため、気候風土・歴史・産業等で類似点の多いギリシャ国のミティリニ市と国際友好姉妹都市縁組を結んだことによります。

※『牛窓町史通史編』に紹介があります



ミティリニ市と旧牛窓町の姉妹都市縁組 締結式
昭和 57 年（1982）7 月